

健康保養都市の市政運営方針は 知恵と汗を結集した《未来協知》

「場の力」で創造する魅力と活力

各地の都市を訪問し、街なかを歩いていると、思い掛けないことから「その土地らしさ」を実感することがある。今回取材させていただいた伊東市でいえば、それは2階建てないし3階建ての構造を持つ整形外科クリニックが多いことに気づかされた。

聞けばこうした構造の整形外科クリニックは、1階か2階に天然温泉のリハビリ用温浴施設を併設している例が多いのだそうだ。

温泉大国・日本の数ある温泉地の中でも有数の湧出量(第4位)を誇り、昭和24年に全国4カ所しかない国際観光温泉文化都市の指定を受け、平成10年には健康保養地として国のモデル指定も受けている伊東市は、古来、温泉保養地として親しまれてきた。

心身のリハビリテーションにも最適な良質の温泉を豊富に湧出する伊東市に、リハビリ

用温浴施設付きの整形外科クリニックが多いのも、考えてみればすんなり納得できる。

平成25年3月1日に開業した近代的な総合病院「伊東市民病院」の前身である旧国立伊東温泉病院の特色も、文字通り豊富な温泉を活用した温泉リハビリ医療にあった。そのため伊東温泉は昔から肉体のケアに熱心なスポーツ選手の利用が多く、プロ野球・読売巨人軍の伊東キャンプも、そんな縁から始まったとされる。中でも長嶋監督時代の巨人が昭和54年秋に行った《地獄の伊東キャンプ》は有名で、後の巨人軍黄金時代の礎を築いたキャンプとして、今もプロ野球ファンの間で伝説的に語り継がれる。

「その《地獄の伊東キャンプ》でも使われた伊東スタジアムの跡地に、実は現在の伊東市民病院は建っています」

そう語るのは佃弘巳・伊東市長。

東伊豆地方の基幹病院の役割をも担う伊東市民病院は、当初、平成13年3月に旧国立伊

東温泉病院を建物ごと引き継

ぎ、診療科を増やす形でスタートした。しかし、引き継いだ建物は築40年以上で老朽化が激しく、平成25年に伊東スタジアムが取り壊された跡地に新たに建設し直され、新・市民病院として移転開業した。

ちなみに旧国立伊東温泉病院の前身は、戦時中に各地に建てられた傷痍軍人用の療養所(傷痍軍人伊東温泉療養所、戦後に国立伊東温泉療養所に転換され、昭和25年〜平成12年まで国立伊東温泉病院)だった。湯量豊富な伊東温泉のぬくもりと、海山に抱か



つくだ ひろみ
佃 弘巳
伊東市長



噴出溶岩が堆積してできた大室山



大室山山頂の噴火口跡



伊豆半島ジオサイトのシンボル城ヶ崎海岸

れた癒し感あふれる静かな環境は、戦争で心身を荒廃させた人々のリハビリテーションに大いに役立ったと伝えられている。
伊東市では現在、「場の力」と表現する地

域資源を活用した多彩な地域振興施策を実施しているが、市内各所に湧出する温泉こそはまさに伊東市の「場の力」の原点といえるだろう。

「医療技術が飛躍的に進歩し、国民的に健康長寿への希求が強い現在には、いわゆる温泉での療養・保養の形も昔と違い、病気療養より健康保養の意味合いがいつそう強くなっています。伊東市民病院においても、現在はおかつてのような素朴な温泉医療は実施していません。しかし、近い将来、伊東市民病院を核に健康保養と観光を結び付けた伊東市ならではの新しい活性化施策として、『医観連携システム』の構築ができませんいかと考えております」(佃市長)

医観連携システムとは、例えば伊東温泉に宿泊して、豊かな自然環境や、新鮮で体によい海山の天然食材を湯量豊富な温泉とともに楽しみながら、併せて伊東市民病院での



古き良き時代の温泉旅館の粋を伝える東海館(旧旅館、現在は伊東温泉観光文化施設として公開)



昭和の伊東温泉にタイムスリップしたような松川地区(松川の岸边は遊歩道)



伊東市民病院は伊東市および東伊豆地域の基幹病院

健康診断も受けるというような形の観光ツアーが想定されるという。あるいは伊東市民病院で健康診断を受けた後、体調の違いを考慮する形で、市内でも泉質の異なるさまざまな温泉や、海辺の保養がよいのか中山間地の保養がよいのかなど、医師のアドバイスできめ細かく推奨してもらうなど、さまざまな形が考えられる。いずれにしても、この企画が実現すれば、まさに国際観光温泉文化都市にして健康保養地でもある伊東市ならではの、医・観が連携した新しい旅の形の発信になるだろう。

醸成されつつある 「伊豆は一つ」の気運

伊東市をはじめとする伊豆半島各地が、風光明媚で多様な自然環境を備え、豊富な温泉が湧出しているのは、伊豆半島がまさに活発な火山活動によって形成されてきた事実由来している。近いところでは平成元年、伊東市の沖合約3kmで海底噴火が起こった。その結果、伊東市の沖合の海底には手石海丘という名称の海底火山が新たに誕生している。

このように活発な火山活動の痕跡や証しは、伊豆半島各地で容易に目の当たりにすることができる。特に伊東市にはその痕跡が豊富にある。また、海岸線のごつごつとした岩場や伊豆スカイライン沿いの崖など、伊東市内には火山活動の痕跡や内部構造などが随所で目の当たりにできる。

そうした地理的・地学的特質の素晴らしさを世界に発信するべく、伊豆半島に位置する7市6町(現在は全15市町)に増加は平成23年に「伊豆半島ジオパーク推進協議会(会長 佃弘巳・伊東市長)」を設立、日本ジオパークネットワークに加盟(平成24年)するとともに、現在では世界ジオパークネットワーク(以下、GGN)への加盟を目指して積極的な活動を展開している。

「ジオパークのジオは地球の成り立ちにもつながるような自然の景観や地形、岩や鉱



小室山公園でのつつじ祭りの様子(毎年4月29日～5月5日)

物等の天然資源などを指す言葉で、そうしたジオのよく見られる風景のことをジオサイトと言います。伊豆半島はまさにこのジオサイトの宝庫ですが、伊東市の観光名所でもある城ヶ崎海岸や、大室山・小室山などは最も典型的なジオサイトといわれています(佃市長)

城ヶ崎の海岸線と大室山・小室山の景観は実際、これぞジオサイトというべき迫力とともに、火山活動が生み出す芸術的なまでの造形の妙を余すことなく伝えてくれる。

特に優美な円錐形をしている大室山と小室山は、粘り気の少ないタイプの噴出溶岩が冷えて固まった丘で、地質学的にはスコリア丘と呼ばれる。今回の取材では大室山の山頂をリフトで訪れることができたが、西側の眼下



綱引き、尻相撲など楽しい種目5つで開催される「温リンピック」

に広大な噴火口跡を眺めつつ、東側の眼下には相模湾の茫洋とした海原が見渡せる、周囲360度遮るもののない山頂の景観は、表現する言葉がちよつと見つからないほどに見事なものだった。

伊豆半島ジオパークのGGNへの加盟は伊豆半島全市町の悲願ではあるが、残念ながらまだ加盟決定には至っていない。その理由はいくつか挙げられているが、さらにGGNの事業が昨秋にユネスコの正式事業化されたことなどで、手続き上の変更点などもあり、現時点では最速で平成30年春の加盟になると見込まれている。

「それでも伊豆半島ジオパークは、依然として国内では唯一の世界ジオパーク候補地として、国内推薦を受けております。ユネスコの正式事業へと変更がなされたことで、申請書再提出等の条件も指摘されておりますが、

逆に言えば、伊豆半島ジオパークの加盟が認められれば、現時点で、世界遺産などと同格のユネスコ正式事業化以降に認定される国内最初のジオパークになるという榮譽も加わってきます。伊東市だけの問題ではなく、伊豆半島ジオパークの世界加盟は伊豆半島全体の活性化のためにぜひとも必要な事業です。弛むことなく今後も地道かつ積極的に、加盟に向けた活動を牽引していく決意でおります」
(佃市長)

伊豆半島ジオパークに加盟する自治体は現在「伊豆半島全15市町」と前述したが、このうち純粋に半島部に市域・町域があるのは6市6町だ。それに内陸部で隣接する沼津市（合併で半島部の町村が加わった）、長泉町、清水町を加えて15市町に拡大されたわけだが、「これらすべての加盟市町による『伊豆は一つ』という気運の盛り上がり、ジオパークの活動をはじめから非常に強くなった」と語る佃市長は、さらに「伊東市の活性化も伊豆半島全体が活性化しなければ、真の意味での活性化にはならない」と強調する。

伊豆半島は近世以前には伊豆国（豆州）として長い間一国を形成していた。隣接する地域と合わせて伊豆文化圏を形成してもいたわけで、伊豆半島ジオパーク構想によって図らずも古来の広域圏が復活した形といえる。GGNへの加盟時期がいつに

なるかはともかく、多様な自然環境と多彩な地域資源が混然一体となった新広域圏としての「伊豆国」が手を携えていけば、伊豆半島地域の基幹産業の一つである観光振興には、今後、より変化に富んだオプションが生まれてくることだろう。

行財政の健全化と市民協働の進捗

伊東市の各種施策の資料を拝見していると、キーワードが非常に多いことに気づく。それは時宜に応じて施政方針を進化させてきた佃市長の巧みな「キャッチフレーズ使い」の反映とも思えるが、その変遷を見ていくと平成17年に就任後、現在に至る足掛け12年の伊東市政の推移がよく分かるのだ。

市財政の立て直し（伊東再生）を旨に佃市長が就任した当初の伊東市政のキーワードは



小室山公園は今(2～3月)が市の花・椿の見頃



伊東市を代表する海水浴場オレンジビーチ

「3つのKと現場主義」だった。3つのKとは「健康（市民の健康増進）、観光（観光振興）、改革（行財政改革）」の頭文字で、現場主義は机上の政治ではなく、市民の中に積極的に分け入って問題解決を図る姿勢を実現するとの決意を表現するものだった。伊東市の市制60周年（平成19年）を経て、平成21年ごろからは、「3つのK」が「8つのK」へとバージョンアップする。3つのKに「経済対策・子育て支援・教育・環境・危機管理」の5つのKが、重点的な取り組みポイントとして新たに加わったのだ。後にこの「8つのK」は「いとう8K」と称される。これは伊東市の名所・景

観を網羅した「伊東八景」に引っかけたネーミングである。

さらに平成21年からは、佃市長が就任当初から掲げてきた「伊東再生」という施政方針の大命題は「伊東創造」へと変化する。またこのころから市民協働についての市民への呼び掛けが従来以上に増え、平成23年の施政方針のキャッチフレーズは「いとう8Kの協創・実践」へと変化する。そうして平成25年からは施政方針の大命題は「伊東創造」から「未来協知」へと変わった。そして、翌26年には「未来協知の実践」、翌27年には「未来協知の更なる実践」、今年（平成28年）初頭には「未来協知の発展」が大命題となり、「いとう8Kを基本に未来協知の発展に全力で取り組む」という市長の方針が広報などで発信された。

未来協知というのは佃市長の造語で、「伊東市がこれまでの歩みで培ってきた英知を集し、これからの未来に向けて、市民の皆さんとともにそれを生かしていく」（佃市長）という意味合いを持つ。

施政方針などのキーワードやキャッチフレーズの変遷をこのようにあえて並べてきたのはほかでもない。その変遷をたどることにより、佃市長就任後に不断の決意で推進されてきた行財政改革が着実に効果を挙げていく過程で、予算配分が「我慢・引き締め」の時代から使うべきところには使うという積極予算へと変化し、それとともに市政運営の推進力が市民協働主体へと順を追っていく過程まで



伊東ブランドの商品が満載のアンテナショップ「ぬくもーる」

もが、非常に分かりやすく表れていると思うからだ。

そして平成28年1月付けで策定された行財政改革大綱「伊東市公共経営改革大綱（平成28～32年度）」では、「第四次伊東市総合計画」で示された将来像「ずっと住みたい、また来たい 健康保養都市 いとう」を実現するべく、「市民の信頼に応える行政運営」「健全な財政運営」「市民参画によるまちづくり」への力の傾注強化が、改めて明確に発信されている。

いとう創造大賞と

「いとう8K」

伊東市における市民協働事業の進化の現在

伊東市

市 政 ル ポ

(静岡県)



伊東温泉の冬の風物詩、冬花火大会&ソーズラ祭り

の協働で、年間を通じて伊東温泉への誘客キャンペーンを行っていく(「佃市長」という。そのほか、情報誌や広告、フェイスブックなどを多彩に活用しつつ、伊東市の良さが全国発信されていくことになる。



伊東ならではのイベント「ひもの開き日本一大会」

地は、平成24年度から始まった市民提案型事業「いとう創造大賞」への市民の公募作品の充実が、如実に物語っていると見える。

公募テーマは年度ごとに変わるが、これまでに事業化(27年度分は28年度実施に向け準備中)された提案は次のようになる。

◇平成24年度公募(テーマ「子育て支援」) Ⅱ

ファミリーサポートセンター運営事業／幼児眼科検査事業(定期検診時に実施)

◇平成25年度公募(テーマ「観光」) Ⅱ 健康保養

地づくりの事業の一環としての合宿誘致事業／観光地での貸し傘事業

◇平成26年度公募(テーマ「健康」) Ⅱ 健康CO

ME 噛む推進事業(学校、幼保、福祉施設などでの歯の健康講座開催)

◇平成27年度公募(テーマ「経済対策」雇用創

出と起業促進) Ⅱ 福祉・介護プロフェッショナル養成事業／天城の自生植物を活用した植物精油や茶の製造／小中学生対象の未来の起業家育成プログラム／自然農法普及活動事業

応募者は多彩で、学生や高齢者、一般主婦や会社員などのほか、市内在住の医科大学名誉教授まで実幅が広い。市民協働や市民参画への意識が年齢や性別、職業の違いを超えて浸透しつつある現況がよく分かる。

また伊東市は一昨年7月にリクルートライフスタイル社と業務委託契約を結び、「いとし、いとうし。」をコンセプトとする専用サイトを開設した。「愛し、伊東市」をもじったサイトを活用して市民・宿泊施設・飲食店などの

市財政の改善(節約)が何よりも優先された時代から、改善の進ちょくとともに、時期に応じて数々生まれしてきたキャッチフレーズは既にご紹介した通りだ。さらに「いとう創造大賞」の市民公募事業の進化ぶりとは併せ、「いとし、いとうし。」という卓抜なキャッチフレーズが、市制70周年の節目(平成29年)の直前に新登場してきたのは興味深い。「未来協知の発展」を旨とする伊東市の市政運営が、あたかも健康保養地にふさわしい「愛」を全面基調とする別次元(春の訪れ)へと、いよいよシフトし始めた兆しのようにも思えてくるからだ。

(取材・文 遠藤 隆／取材日平成27年12月22日)